上田女子短期大学附属図書館報

みすず

50
2023.12

1号　昭和49年

6号　昭和54年

17号　平成2年

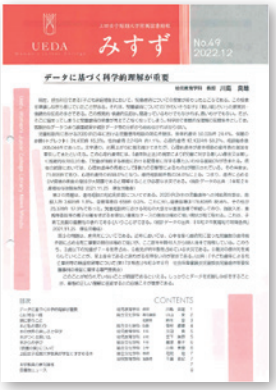
20号　平成5年

図書館だより
創刊50号・
短大創立50周年
記念号

24号　平成9年

30号　平成15年

40号　平成25年



49号　令和4年

UEDA
Women's Junior College

附属図書館 1994年～ 2023年のあゆみ

附属図書館は上田女子短期大学が発足した1973年4月に開館しました。
開館から1993年までの歴史は、「みすず」20号で辿ることができます。
ここでは、1994年～ 2023年までのあゆみを振り返ります。

平成

1994 利用者用検索用端末機の増設（４台）

1995 図書館長に丸山 信教授 就任
AVルーム誕生

1996 タッチパネル式検索機増設（１台）
増改築工事開始

1997 ５月増築工事完了

1998 １階・地下１階に積層書庫完成

1999 ブックディテクションシステムの導入、雑誌架・キャレルデスク等の備品の整備

2000 図書館長に松田 幸子副学長 就任
「第１回七夕文学賞」開催（～ 2014年）

2001 図書自動貸出・返却システム
通称「貸出ROBO」導入

2002 図書館長に塩入 秀敏教授 就任

2003 大型絵本架・紙芝居架導入

2004 上田市五加自治会より五加夜学校時代に使用された教科書（和本）寄贈、受入整理

2005 「Japan Knowledge」「信濃毎日新聞記事データベース」「G-サーチ」導入
DVDの展示・収納棚更新

2006 図書館アプローチ前に自立看板設置（寄贈）

2007 第７代図書館長に松田 幸子学長 就任
自動貸出返却装置　住友3M「ABC-STⅡ」導入
図書館ホームページ公開開始

2008 第８代図書館長に大橋 敦夫教授 就任

2009 「図書館職員学び直し講座」開催
（～ 2012年・全６回）

2010 図書館サークルFLC
（Future Librarians Club）発足

2011 図書館１階AVルームリニューアル
（機器の更新）

「学校図書館新聞コンクール（2011・2012年）」
受賞作品展示

2012 上田女子短期大学リポジトリ本公開開始

2013 図書館サークルFLCによる「図書館員とそのたまごたちによるおはなし会」開始
（於：上田情報ライブラリー）

2014 夏季休暇中の女子高校生への図書館開放開始
第16回図書館総合展「学術情報オープンサミット2014　ポスターセッション」初参加
（～ 2018年）

2015 国立国会図書館「図書館向けデジタル化資料送信サービス」導入

2016 図書館講座開講開始

Twitterアカウント開設

2017 第９代図書館長に長田 真紀教授 就任

2018 夏季休暇中の女子高校生への図書館開放の対象を女子中学生まで拡大

令和

2019 図書館耐震補強工事
（2019年10月７日～2020年２月）

2020 新型コロナウイルス感染症対応
（通学型授業再開まで貸出冊数無制限・期間延長、メールでのレファレンスの受付等）

１階演習室が地域連携センターに

2021 第10代図書館長に花岡 勉教授 就任

2022 １階演習室の一部が大学改革室に地域連携センター・大学改革室の拡大に伴いAVブースを２階閲覧室へ移設、ブラウジングスペースを元AVルームに移動

2023 第11代図書館長に多田 幸子准教授 就任
絵本コーナーリニューアル
（名称「おやことしょかん Biv（ビブ）」）

図書館の五十年

初代司書　長張 和子

昭和四十八年五月一日。この日は、本州女子短大から法人移籍により（現二十番教室）の図書館（室）に着任した日です。それから約三十数年、司書の仕事一筋に勤めさせて頂いたことは感謝の念に堪えません。図書約一万冊と図書原簿一冊を渡され、蔵書印作りから始めたことが忘れられません。

長い図書館生活では色々ありましたが、忘れられない思い出は、独立図書館建設と、図書館の機械化（コンピュータ化）の二点でしょうか。昭和五十五年、北野理事長の意向で、校舎前庭西側に独立の図書館が建設されました。今のガラス張のデザインは北野理事長がヨーロッパのある図書館の外観がイメージにあったとのことです。管理する者としては、図書に日光が当たらないように、どう配置するかに苦慮しました。学科も増設され、時代的にも機械化が嵐のように押し寄せてきた平成元年、蔵書データの入力を開始し、閲覧室の蔵書二万冊余の入力が完了した翌年の九月に（後期開始に合わせ）コンピュータによる貸出を開始しました。このことは、県内大学短大中で初の機械化一号となりました。

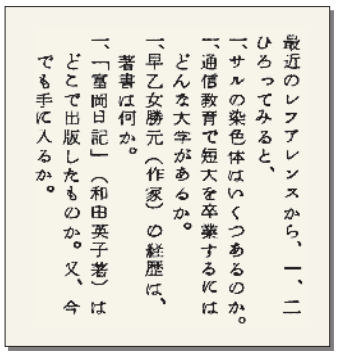
その後、増築もされ、世界はネット社会になり、今やどこの図書館の蔵書もネット検索可能となりました。隔世の感があります。

五十周年を機に上田女子短大がますます発展されていくことを祈念いたします。

デジタルアーカイブで見る附属図書館のあゆみ

総合文化学科　専任講師　井上　奈智

上田女子短期大学「図書館だより」１号（1974年）
司書課程を勉強した学生さんは回答できますか？


最近のレファレンスから、一、二
ひろってみると、
一、サルの染色体はいくつあるのか。
一、通信教育で短大を卒業するには
どんな大学があるか。
一、早乙女勝元（作家）の経歴は、
著書は何か。
一、「富岡日記」（和田英子著）は
どこで出版したものか。又、今
でも手に入るか。

大学にとって図書館とはどういうものでしょうか。上田女子短期大学（以下、「上女」）が蓄積してきた「デジタルアーカイブ」をつかって、上女において附属図書館がどのように捉えられてきたかを見ていきましょう。

●大学のシンボル？

上田電鉄側から附属幼稚園を過ぎて最初に見える大学の建物が附属図書館です。築40年を超えたとは見えないほどモダンな雰囲気ですね。1993年に刊行された『上田女子短期大学の二十年』には、「学園のシンボル独立図書館」（98頁）と紹介されています。「情報化社会に向けてリーダー格を発揮する」（目で見る二十年の52枚目の写真のキャプション）ものとして、期待を寄せられていることが分かります。

図書館はそれまで本校舎の教室のような場所でしたが、1980年に独立した建物として開館しました。図書館の充実ぶりは県下有数だったようで、繰り返しリーダー格と謳われています（プロローグ45頁、101頁）。上女において、図書館は中心施設であり、その機能も充実しています。

●楽しい場所？

本文が載っている『みすず』は図書館の広報誌です。以前は『図書館だより』という名称でした。2010年に発行されたみすず37号には、学長からのメッセージが載っています。「図書館を楽しむ」と題し、図書館で寝ることは学生の特権であり学生同士でリラックスしてもよいと、司書（図書館担当の先生方）に怒られるかもしれないとしつつ、述べています（１頁）。司書も、もちろん怒ることはありません。遡ること2000年のみすず27号には、入りやすく楽しい図書館にしたい、としています（８頁）。

上女には、幼児教育学科があり、大学図書館の中でも目を見張るほど絵本が充実しています。図書館の増築にあわせて1977年の夏に、児童コーナーが新設されました。46年後の今年の夏に大幅なリニューアルが行われ、「おやことしょかんBiv（ビブ）」となりました。絵本コーナーが囲われた空間となり、よりリラックスしながら絵本を手に取ることができるようになりました。学生や教員はもちろん、附属幼稚園の子どもや親も絵本を読みに来ます。

今年は図書館資料としてボードゲームを導入しました。公共図書館ではゲームを導入する動きが少しずつ広がっていますが、大学図書館ではまだ珍しい。上女の図書館には、多くの映像や音楽資料もあり、気軽にリラックスして楽しめる場所なのです。

●情報センター？

もちろん大学図書館のもっとも重要な役割は、教員や学生の研究、教育活動を支援することです。それを実現する方法は本のみではありません。図書館という名称も少しずつ変わってきており、2003年開館の上田駅前の図書館は「上田情報ライブラリー」といいます。上女においても、1990年の図書館だより17号では、今後は単なる図書館でなく「情報センター」になることを目標としています（15頁）。

上女の図書館の「情報センター」としての強みは、県内の短期大学で蔵書が最大級であることです。大学図書館の重要な役割のひとつに機関リポジトリの運営があります。機関リポジトリとは大学が教育、研究活動を恒常的に蓄積、保存する仕組みです。県内の大学や短期大学のうち、３番目に機関リポジトリの登録件数が多く、学内のイントラネットでも発行物や研究や教育の成果を発信や蓄積していることも図書館の強みです。それら「デジタルアーカイブ」を用いて、『上田女子短期大学の二十年』や『図書館だより』、『みすず』を、インターネットで、もしくはイントラネットで見ることができます。

図書館だより１号には、冒頭のレファレンスサービス（調査相談）の紹介があります。2023年現在では、インターネットの普及など研究環境も調査の方法も大幅に変わりました。大学図書館は時代の変化に合わせて、教員や学生が楽しく教育や研究を行い、または楽しく過ごせる基盤として、活動していきます。

絵本好きの話

幼児教育学科１年　佐藤 千沙

小学校3年生の頃、長かった建て替え工事が終わり校舎が新しくなった。新しくなった図書館には、畳のスペースがあり、私はそこで壁にもたれながら本を読むのが好きだった。

文字を読むことが苦手だった私は、周りの友達が長めの小説や分厚い本を読み始めている中、絵本を読んでいた。その頃のお気に入りの絵本は今でも覚えている。『ぎょうれつのできるおいしいえほん』シリーズの一つ、『ぎょうれつのできるすうぷやさん』という絵本だ。森の動物たちがいい匂いにつられてたどり着いた先はトカゲの魔女の家で、トカゲの魔女が飲むすうぷでは量が足りないためみんなですうぷをつくってお店屋さんをしようという話で、温かく描かれた料理がとても美味しそうで何度も何度も読み返した。今でもたまに読み返したくなり、短大の図書館で探してみたところ見つけることができとても嬉しかった。

小学校高学年にもなって絵本なんて、と思われるかもしれないが意外と絵本から学ぶこともある。冒頭、図書館には畳のスペースがあり、お気に入りだったと述べた。その畳のスペースは壁の本棚沿いにあり、そこにも絵本が入っていた。そこで出会った絵本が『川端誠 落語絵本』というシリーズだ。そのまま落語を絵本にしたもので、話だけではわかりにくいなという人も絵で見て背景を理解しやすくなっている。私は、このシリーズで『ときそば』や『めぐろのさんま』等の話を知った。あの時、畳に座ってなんとなく手にとってみていなかったら私は未だに、落語は『じゅげむ』や『死神』等の教材としても取り上げられやすいものしか知らなかったかもしれない。

絵本＝子どもの読み物と考える大人は少なくはないが、私はそうではないと思う。大人になって絵本を読んでみると、幼い頃の自分とは違う世界が見えると思う。懐かしさを感じて温かい気持ちになったり、新たな発見をしたり、意外と楽しめる。だから、もしあなたが幼い頃に好きだった絵本を思い出せたなら、もう一度その絵本を読み返してみてほしいと思う。

私も、あの頃好きだった絵本のページをもう一度開いてみようと思う。

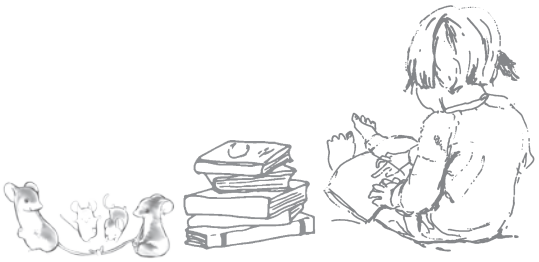
絵本との思い出

幼児教育学科２年　松本 紗和

私は小学生のころ、本を読むことはあまり好きではありませんでした。長い文章、挿絵も少なかったり無かったりする本を読んでいると眠くなってしまいました。ですが、保育園で先生が読みきかせをしてくれたことや、小学校では保護者が来て読みきかせをしてくれた経験から、絵本を読むことはとても好きでした。『バムとケロ』シリーズや『となりのせきのますだくん』は、知ってる人が多くいると思います。

私は特に『14ひき』シリーズがとても好きでした。 14匹家族のネズミが引っ越しをしたり、ピクニックをしたりする絵本で、小さいネズミがどんなことをして過ごすのか、小学生の私にとって、とても面白い物語でした。それらの絵本が小学校の図書館には手に余るほど置いてあり、うれしくて休み時間に読んだり、借りたりもしました。中学生、高校生になっても、絵本が好きなのは変わりませんでしたが、中学校や高校の図書館には、絵本が少ないことや、周りの目を気にしてしまうことから、絵本を手に取ることから遠ざかっていきました。短大に入り、保育者を目指す中で、絵本を読んできた経験が、とても大切だったことを感じました。自分が絵本を読むことによって、どの絵本だったら子どもが喜んでくれるかを考えたり、子どもに読み聞かせをする時や、関わる時に、どの絵本が面白いかを伝えたりすることができることを学びました。

子どもの頃に見た絵本の記憶は、大人になっても鮮明に覚えているものです。大人が子どもに読み聞かせをすることは、とても大切だと感じます。そこから絵本に興味を持ち、自分で読んだりすることに繋がり、様々な絵本に出会っていきます。私は来年保育者になりますが、子どもたちが絵本と関わっていかれる環境を作り、いい経験や思い出となるように過ごしていきたいです。



本を読むことで得られたこと

総合文化学科１年　金子 歩実

私は小学生の時、漫画を読むことがとても好きで、小説には全く興味がありませんでした。なぜかというと、小説は漫画とは違って絵がなく、文字ばかりで読んでいて退屈だったからです。しかし、中学生になるのにも拘わらず、今まで一度も小説を読んだことがないのは、さすがにまずいのではないかと思い、読書が好きな父親におすすめの本を聞いてみることにしました。

そこで勧められたのが東野圭吾の『容疑者Xの献身』でした。私は、ミステリー系の話は読んだことがなく、すぐに飽きてしまうのだろうと思って、父親から渡された本を読み始めましたが、ふと時計を見ると１時間が経過していました。その日から、有名作である『ナミヤ雑貨店の奇蹟』、『マスカレード・ホテル』、『ラプラスの魔女』などを学校の図書館で借り、休み時間に読みました。この物語にはどのような結末が待っているのだろうと想像しながらページをめくる瞬間は、とても楽しみなものでした。読むペースが速かったので、1日に1冊読み終えてしまう時もありました。背景描写や心理描写が細かく書かれていて、読み始めるとその世界に引き込まれていくようでした。

それ以来、図書館や本屋に足を運んだ際は、ミステリーに限定せず、様々なジャンルの本を手に取り読んできました。それにより幅広い知識が身につき、様々なことに興味を持つこともできました。例えば、私は歴史が苦手だったのですが、図書館にあった『日本の歴史』(集英社)という本を読んだことにより、歴史が好きになりテストで良い点を取ったことがあります。このように、本を読んだことによって今まで苦手だったことが得意になることもあるのです。

私は、東野圭吾という一人の小説家と出会ったことで、小説を読むことがとても好きになりました。皆さんにも、ぴったりフィットする小説家がどこかに、必ずいるはずです。まずは、図書館に行って読んでみたい本を探してみてください。きっと本との良い出会いが待っているはずです。

本の読み方

総合文化学科２年　中澤 美咲

皆さんはどのように本を読みますか？「本を読む」といっても本を読む目的、本を読む人によって読み方が異なると思います。例えば小説なら、端から端までストーリーを追いかける人がいれば、斜め読みでストーリーを把握するという人もいると思います。また、論文を書くために本を読むというなら本の読み方は小説を読むときと読み方が変わると思います。私は今卒業論文を書いています。卒業論文を書くにあたり前期のゼミナールでは書籍も読みました。そこで私は気が付いたことがあります。それは、論文を書くための本の読み方は小説のように端から端までなく、自分が必要だと思ったところを読めばよいということです。そしてそのあと論文を書いていく中で分からないことがあったら、ページを戻り読み直せばよいことが分かりました。ここで私が本を読む上で感じたことは、本の読み方はたくさんあり、そして自由であることです。だから自分の本の読み方と、人の本の読み方を比べ、本の読み方を変えてみることもよいのではとも思いました。この他にも本のジャンル、読む目的に応じて読み方を変えるのもよいと思います。

本はなんとなく堅いイメージがあり、今まで読んでこなかった、あるいは今でも本を読むのが苦手という人もいると思います。そのような人もこれからは、「本は難しい」「本を読むのが苦手」という固定観念を変え自分なりの本の読み方で読書をしてみてはどうでしょうか。前述したとおり、私は本の読み方は自由だと思います。だから無理して本の端から端まで読まず、自分の気になるところだけ読んでみたり、飛ばし読みなどをしてみて、徐々に本を読む機会を増やしていけばよいと思います。そうなると自分なりの本の読み方が分かり、本の面白さや本の奥深いところまで見えてくると思います。私自身は本の読み方が固定化されつつあり、新しい読み方に出会っていません。これから社会に出るにあたり、本を読む機会が減ってしまうのか心配ですが、新しい本の読み方を見つけ、本をより楽しみながら読んでいきたいと思います。

上田女子短期大学教員が学生にすすめる本 Vol. 9

幼児教育学科 准教授
吉澤 俊

私の読書の中から

『現代アートの哲学』 西村清和著 産業図書 1995年

初めて読んだ時，恥ずかしながら何が書いてあるのかよく理解できませんでした。悔しくて凄まじい勢いで本を読み，必死に勉強した後にようやく「わかった!」。本と出会うことの意味を実感した一冊です。今思うと最初にわからなくて良かった・・・。

これは読んでおこう－教員・研究者の立場から

『観点変更：なぜ、アトリエインカーブは生まれたか』
今中博之著 創元社 2009年

「障がい者アート」という括りを無自覚に使うことなく，デザイナーの立場から日本の福祉現場での「観点」を変えることで，アートとは，障がいとは，さらに生きることとは何かということを考えさせてくれました。現在に繋がる「観点変更」です。

総合文化学科 専任講師
遠田 将大

私の読書の中から

『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』
ブレイディみかこ著 新潮社 2019年

予測不可能な時代を生きていくこれからの学生にぜひおススメしたい本です。11歳の「彼」は，イギリスの学校で差別や格差，貧困といった問題に直面し，そのことに葛藤しながらも，成長していきます。これからの社会で人として生きていくために大切なことは何か…改めて考えるきっかけとなった本でした。

これは読んでおこう－教員・研究者の立場から

『発達心理学：周りの世界とかかわりながら人はいかに育つか』
藤村宣之編著 ミネルヴァ書房 2019年 第２版

幼児教育学科の学生に読んでもらいたい一冊です。子どもがどのようにして世界と関わり，そして，育っていくのかが非常に分かりやすく書かれています。発達心理学という学問の大枠を理解するのをきっと助けてくれるでしょう。

『教育と脳：多重知能を活かす教育心理学』 永江誠司著 北大路書房 2008年

近年の心理学は，脳科学といった分野から盛んに研究が行われています。教育界においても，脳科学の知見を活用することの重要性が叫ばれてきていますが，本書はそのことについて理論的かつ実践的に説明してくれています。心と脳の関係に興味がある学生は，ぜひ読んでみてください。

新刊 2023年 本学教員の新刊著作 （今年発行の単独著書・共著書・分担執筆書）

大塚美奈子 先生

『実践事例を通して具体的なかかわりを学ぶ保育現場における特別支援』
教育情報出版 2023年2月発行（分担執筆）

『実践!ムーブメント教育・療法：楽しく動いて、からだ・あたま・こころを育てる』
クリエイツかもがわ 2023年4月発行（分担執筆）

大橋敦夫 先生

『信州から考える世界史：歩いて、見て、感じる歴史』
えにし書房 2023年7月発行（分担執筆）

千葉直紀 先生

『私たちは生きる：災害から子どもたちの命を守るために』 新読書社 2023年6月発行（分担執筆）

図書館ガイド

1 「おやことしょかんBiv（ビブ）」完成！

附属図書館には6,000冊を超える絵本のほか、赤ちゃん絵本やしかけ絵本、大型絵本や紙芝居、パネルシアター、エプロンシアターなどの資料が充実しています。

その豊富な蔵書を、附属幼稚園をはじめ地域の子どもや大人にも広く活用していただくため、創立50周年記念事業の一環として絵本コーナーをリニューアルしました。棚の配置替えをして靴を脱いで過ごせるようにマットを敷いたほか、ベビーゲートやコーナーガード、ぬいぐるみを設置しました。1階ブラウジングスペースには、授乳・おむつ替えコーナーを設けました。

また、親しみを持ってもらえるように、ラテン語で図書館という意味の「Bibliotheca（ビブリオテーカ）」と赤ちゃんのよだれかけの「ビブ」を掛けて、“おやことしょかん Biv(ビブ)”と名付けました。

早速、附属幼稚園の園児や保護者の方に利用していただいています。今後は開放日を設けて地域の親子にも利用していただいたり、おはなし会や図書館講座などのイベントを開催したりと、地域の方々との交流の場、また学生の学びの場として発展させていきたいと考えています。

2 令和5年度図書館講座「ボードゲーム交流会」開催

● 2023年10月28日(土)

総合文化学科専任講師の井上奈智先生を講師に、図書館所蔵のボードゲームや、先生のコレクションを使って「ボードゲーム交流会」を行いました。学海祭と同時開催だったこともあり、地域の方々や学生あわせて21名の方にご参加いただきました。様々な種類のボードゲームを体験し、賑やかで楽しい学びと交流の場となりました。

3 OPACサービスをバージョンアップしました

● OPAC URL：https://uwjc.opac.jp/opac/top

9月に附属図書館の蔵書を検索できるOPACサービスをバージョンアップしました。主に便利になった点は下記のとおりです。

- これまで検索できなかった視聴覚資料が検索できる
- ブックリスト機能から、テーマブックスで紹介している図書等のリストを見ることができる
- 視覚的に見やすく、スマートフォン表示にも対応
- 15分単位で貸出状況等が更新される

バージョンアップしたOPACを活用して、たくさんの本と出会ってくださいね。

編集後記

短大創立50周年となる2023年。新型コロナ感染症が５類感染症へ移行し、大規模な参集型イベントが再開されるようになりました。本学附属図書館においても、学外者向けの利用サービスが再び始まり、長い長いトンネルを「やっと抜け出せた！」という感があります。この秋には6,000冊を超える絵本･児童書の蔵書を活かして、念願であった、幼い子どもとその家族のための図書スペース『おやことしょかんBiv（ビブ）』を開設。すでに、ゆったりした雰囲気の中で子どものための本を味わう家族の姿が見られています。

もとの状態を取り戻すにとどまらず、“これまで”という枠組みの外に出て新たな挑戦をする、温めてきたアイデアをアイデアのまま終わらせない―次の50年に向け、そんなふうにあゆみを進めていければと思います。

附属図書館長 多田 幸子

みすず
上田女子短期大学附属図書館報　第50号　2023.12 発行
編集：上田女子短期大学図書館・紀要委員会　発行：上田女子短期大学附属図書館
〒386-1214　長野県上田市下之郷乙620　Tel･Fax：0268-38-6019　E-mail：lib@uedawjc.ac.jp